

神は愛なり光なり 《 神秘と救いの世界 — 霊界物語 》

霊界物語 霊主体従子の巻

第一巻 概要・序



誠の貴美はあらがねの	地にくだりて世を守る
古りにし悪は根絶し	聖きよろこび茂るらむ
栗なす司とく来たれ	神は日に夜に待ちたまふ

大本賛美歌第三九 （六一巻の第一〇五）

はじめに

霊界物語資料編（天声社発行）に霊界物語の神教は第1巻の序から第24章までが第1回で、第2回が24章の終わりから5巻まで、第3回が12巻まで、第4回が13巻から72巻までと示されています。ここでは第1回の第一巻、序から第二四章までを勉強したいと思います。初めての方にも理解しやすいように、大本の教えを霊界物を中心に、その他出口聖師の書かれた関連の書から、また一般の考え方も載せ、さらに私のつたない考えなども交えて紐解いてみました。とはいえ、深く理解するには霊界物語勉強会に参加し、全巻を通読されることをおすすめします。

尚、本稿は愛善世界社版霊界物語を基にしたものです。原文を本稿に載せると頁数が膨大になるのでここでは省略しています。霊界物語は大正十年から書かれた物語なので、現代人には古典に近いものがあります。特に第一巻の序から第24章までを丁寧に読み進めるには現代語訳が必要かと思ひ掲載しました。しかし、必ず霊界物語本文を読んだ後に参考として現代語訳を読んでください。

また、若い人には用語の解説が欠かせません（別紙参照）。

尚、勉強しやすいように8回に別けて掲載します。

目		次
第1回	霊界物語の概要 2	第二篇 幽界より神界へ
	現代語訳と解説	第12章 顕幽一致 78
	序 4	第5回 第13章 天使の来迎 90
第2回	基本宣伝歌 14	第14章 神界旅行(一) 95
	発端 28	第15章 神界旅行(二) 102
第3回	第一篇 幽界の探検	第16章 神界旅行(三) 105
	第1章 霊山修行 44	第6回 第17章 神界旅行(四) 112
	第2章 業の意義 46	第18章 霊界の情勢 118
	第3章 現界の苦行 51	第19章 盲目の神使 125
	第4章 現実的苦行 54	第三篇 天地の剖判
	第5章 霊界の修業 56	第20章 日地月の発生 127
	第6章 八衢の光景 60	第7回 第21章 大地の修理固成 132
第4回	第7章 幽庁の審判 66	第22章 国祖御引退の御因縁 . . . 140
	第8章 女神の出現 69	第23章 黄金の大橋 145
	第9章 雑草の原野 73	第8回 第24章 神政開基と神息統合 . . 150
	第10章 二段目の水獄 75	附記 霊界物語について 155
	第11章 大幣の靈験 76	用語の解説索引 157

※注：本文中の《 》内は筆者の入れた注。

現代語訳は章によっては理解しやすいように区切っています。

訳文中の囲み数字〔例 ①、②・・・〕は後に用語の解説があります。また、途中の数字は原文（愛善世界社版）のページを現します。

霊界物語の概要（大本七〇年史上巻 第四編より抜粋）

第一次大本事件発生後におけるもっとも注目すべきものは、『霊界物語』の口述とその発表にあった。これは大本における「大本の立替え立直し」を、教義的にあらたに具体化したものであったといつてよい。

大正十年の十月八日（旧九月八日）、出口王仁三郎にたいし、「明治三十一年旧二月に、神より開示しておいた霊界の消息を発表せよ」との神示があった。さらに十月十六日には、開祖の神霊から、その発表についてのきびしい督促があったという。それから二日のちの十月十八日から、『霊界物語』の口述がはじまるのである。当時王仁三郎は、大本事件の中心人物として責付出獄中であつたし、そして大本は前述のように、事件によって非常な苦境にたっていた最中である。信者は今後大本の運命が、どうなるかについて一抹の不安をいだいていたし、事実教団の内外には想像的な流言がしきりにとりざたされていた。そのうえ口述のなされたときは、あたかも本宮山の神殿が、当局の破却命令によって破壊されつつあつたさなかである。まさしくそのような状況下にあつて、綾部並松の松雲閣で、神殿破壊の騒音を身近かに聞きながら、王仁三郎による物語の口述が開始されたのである。『霊界物語』の発表が、いかにかいそがれ、かつ経綸《国家などの秩序を整える方策。治国済民の方策》上において重視されたかをうかがうことができる。

大本においては、本来^{いづ}の^{みたま}御魂《出口直、開祖》と^{みづ}の^{みたま}瑞の御魂《出口王仁三郎、聖師》の二大神系があり、そのもとに経綸の^{しんゆゑ}神諭が発表される定めとなつていた。

「竜宮館には^{へんじょうなんし}変性男子《開祖》の神系と^{へんじょうによし}変性女子《聖師》の神系との、二大系統がれき然として区別されている。変性男子は神政出現《神によって治められる政治が来ること》の予言、警告を發し、千辛万苦、神示を傳達し、水をもって^{みたま}身魂の洗礼をほどこし、救世主の再生、再臨を待つておられた」（『物語』一卷発端）とのべられているように、大本にあつては^{いづのみたま}厳^{みづのみたま}霊と^{みづのみたま}瑞^{いづのみたま}霊との二大教祖によって立教の基本がなりたつとされている。そして^{いづのみたま}厳霊の肉の宮であつた開祖は、明治二五年から筆先によって、三千世界の立替え立直しの予言警告を發し、大正七年に昇天をむかえたのである。したがつて、^{みづのみたま}瑞霊の肉の宮である王仁三郎は、開祖昇天の後にあつては、開祖の神業をもうけつぐとともに、^{いづのみたま}瑞霊の神業を完成するため、^{いづのみたま}厳^{みづのみたま}瑞二霊の神業をあわせて統一的に遂行する^{いづのみたま}伊都能売の神の神業をくりひろげるのである。開祖在世中の王仁三郎のつとめについては、筆先《開祖が自動書記で書かれた神示》につぎのように示されている。すなわち「出口《開祖》は三千世界のこと、世界一さいを知らず役なり」とか、あるいは「出口は^き将来のことを知らず役、^{かいちゆう}海潮《王仁三郎》は、それを説いて聞かせて世界を改心させる役じゃぞよ」などとのべられていた。つまり開祖ヨハネは神・幽・現三界すなわち三千世界の立替え立直しをしらせる役であつて、聖師はその由縁を詳細に解説し、人民に理解させて改心させるのが、その使命とされていたのである。したがつて筆先の真解者は、大本にあつては、聖師その人であつて、他のものが勝手な解釈をすることは許されていなかったのである。王仁三郎は筆先の真解ということばかりでなく、開祖の期待していた「みろく」の教説についても、まだ発表していなかつた。それらが発表される時節が、いよいよ近づいてきたとする認識は、つぎの言葉にもあきらかである。そのことについて『霊界物語』第一巻の発端には、「天地剖判の始めより五十六億七千万年の星霜を経て、いよいよみろく出現のあかつきとなり、みろくの神下生して三界の大革正を成就し、松の世を顕現するため、ここに神柱を建て、苦集滅道を説き、道法礼節を開示し、善をすすめ、悪をこらし至仁至愛の教えをしき、至治太平の天則を啓示し、天意のままの善政を天地に拡充したもう時期に近づいて来たのである」と記されている。みろくの神・救世主としての教説を開示し、あわせて筆先の真

解釈を解説的におこなうために、大本事件という重大時期にさいして、その口述がはじめられたのである。大本の教義を確立し、信仰のありかたを立替え立直す統一的集大成の教典として、ここに『霊界物語』をいよいよ公にされるときをむかえる。

『霊界物語』の口述発表がなされた由来は、高熊山における修行と密接なつながりがある。すなわち『霊界物語』と高熊山修行との関係についてはつぎのようにのべられている

本書は瑞月（王仁三郎）が、明治三一年旧二月九日より同月十五日に至る前後一週間の荒行を神界より命ぜられ、帰宅後亦一週間床しぼりの修業を命ぜられ、その間に瑞月の靈魂は霊界に遊び、種々と幽界、神界の消息を実見せしめられたる物語であります。すべて霊界にては時間空間を超越し、遠近大小明暗の区別なく、古今東西の霊界の出来ごとは、いずれも平面的《映画やTVのように》に霊眼《脳裏》に映じますので、その糸口を見つけ、なるべく、読者の了解しやすからんことを主眼として口述いたしました。と記述され、さらに「舎身活躍」は、瑞月が明治三一年の五月、再び高熊山に神勅を奉じて二週間の修業を試み、霊眼に映じさせて頂きしことや、過、現、未の現幽神の三界を探険して、神々のご活動を目撃したる大略を口述する考えである。とかかわれているように、明治三一年の二度にわたる高熊山修業の体験が、『霊界物語』の内容の基本となっている。そのことについて、つぎのようにものべられている。「明治三一年以後今日に至るまで、ほとんど二五年間艱難辛苦を積み、神界の真相の一端をきわめた結果、宇宙真理の一部を霊界物語として発表することとなったのである」とあるごとく、高熊山修業を起点とする道の究明や体験がくわわって、『霊界物語』の口述がなされたのである。したがって、「霊界物語そのものは、つまり瑞月の肉身であり、靈魂であり、表現である」とも意味ぶかくのべられているのである。

筆先には、「三千世界の立替え立直し」が一貫してはげしく主張されている。しかし、なぜ立替え立直しをしな

ければならないか、どうして立替え立直しを成就するか、なぜ良^{うしろ}の金神国常立命^{こんじんくにとこたちのみこと}が太古に隠退し、綾部の大本に再現をみるのか、「元の誠の神」・「世に落ちている神」とか、「世に出ている神」「世を持ち荒した悪神・悪の頭」とか、などの文字がいったいなにを意味するのか、それらについては断片的にのべられているが、世の人々にはなかなか理解し難い。そこでそれらの神々の因縁をつまびらかにし、神代からの神界の経綸を解明し、立替え立直しの意義を明確化してゆくことが、教義の体系化・現代化のために必要となる。また、「われよし」・「つよいものがち」の思潮が世界を悪化せしめたという、その思潮とはどんな思想であるか、「改心」とはどのような情態を意味するものかなどについても、詳細に解明し、体系づけることが不可欠となる。まさにその要請にこたえたものこそが、『霊界物語』なのである。したがって『霊界物語』は、みろく胎蔵の教であるとともに、筆先の内義をも解明した教典でもあった。王仁三郎によって『霊界物語』を、「五十六億七千万の年をへて^{みろく}弥勒胎蔵経^{たいざうきやう}を説くなり」とよみあげられているのも、きわめて理由あることであつた。

そのことは『霊界物語』の内容にもあきらかである。『霊界物語』には宇宙創造から主神の神格・神々の地位因縁と活動・神の世界的経綸・大本出現の由来・神と人との関係・霊界の真相・世界観・人生観・哲学・宗教・政治・経済・思想・教育・芸術などあらゆる問題にふれられている。そして基本的な態度には、神霊の世界が主で現界《物質界》が従であるという「霊主体従」の原則がつかぬかれている。「霊界とは霊妙な世界ということで、顕、幽、神の三界を総称していうのである」とある意義にもとづいて、『霊界物語』という題名がつけられたのも、それがみろく胎蔵の教典であつたからにはほかならない。だが霊界を神霊界のことばかりとうけとるのは尚早である。そこに、現界のことも合わせて含まれていたことを見逃すべきではないだろう。

霊界物語 霊主体從^ね子の巻（第一巻） 《現代語訳と解説》

《序》

現代語訳

この『霊界物語』は、天地が分かれるその初めから天の岩戸開きの後、①神素蓋鳴命が地球上にわがもの顔にのさばる②八岐大蛇を寸断し、ついに大蛇の尾より③叢雲宝剣を得て④天の祖神に献上し、真心を天地に表わし神の理想世界である⑤五六七の世の政^{まつりごと}が成し遂げられ、⑥松の世を建設し、⑦国祖を地上霊界の主宰神となされた、太古の神代の物語であります。また、霊界探検の要点を簡単に述べ、⑧「苦・集・滅・道」（みろくの世への悟りの道）を説き、「道・法・礼・節」を教え諭したもので、決して我々の住む世界の事がらにたいし、偶話的に編集したものではありません。そうはいっても正しい神の住む神界や死後に行く幽界の出来事は、古今東西の区別がなく、我々の住む現実社会に現れて来ることも、必ずしも否定できない事実であり、単に⑨神幽両界の事とのみ思っておろそかにせず、これによって心を清め言行を改め、精神《心》を主とし、肉体《物質》を従とする⑩「霊主体從」の本来の意味を覚って実行されることを希望します。

読者の皆さんのうちには、ここに出てくる様々な神の御活動にたいし、神名の一字か二字が自分の姓名に似た文字が有るからと云って、ただちに自分の過去における霊的活動だと、早合点される傾向があると聞きます。実に誤まった考えといえます。特に注意をしておきます。

上記文章は一見太古に起こった物語のようにも読めます。国祖とはこの大地をお造りになった⑪国常立命で、太古の神代、記紀神話に出てくる伊邪那岐尊、伊邪那美尊以前にこの世を治めておられた神です。世が進歩発展すると共に邪気が発生し、その邪気に犯された神々によって、やむなく国祖は御引退になられます。しかし、「国祖を地上霊界の主宰神たらしめたまひし（主宰神になされた）」とありますから現代の事でしょう。それは太古、御退隠になられた国祖が、再び御出現になるのは明治二五年の元旦、⑫初発の神諭によってです。「三千世界一度に開く梅の花^{うしどろ} 良の金神（国祖国常立命）の世になりたぞよ・・・」と出現を宣言されます。従ってこの「天の岩戸開き」は二度目の天の岩戸開きと考えられます。本来「天の岩戸開き」とは復権を意味します。【12/30 天の岩戸】（「立替え立直し」と言う別の意味もある）最初の「天の岩戸開き」は記紀神話に出てくる「天の岩戸開き」でお筆先には天照大神を欺して出したとありますから二度目の「天の岩戸開き」は正しい形で行われたわけです。

「神素蓋鳴命が地球上に跋扈跳梁せる八岐大蛇^{やまたおろち}を寸断し」とは別に頭が八つに別れた大蛇が居るわけではなく、神人の身体を容器として邪悪を起させる悪霊の意味で太古から現代社会にいたる腐敗した社会を象徴した表現です。現代社会はまさに金毛九尾や八岐大蛇が勝手気ままにのさばる、われよし、強いもの勝ち（優勝劣敗、弱肉強食）の時代です。そして、こうした社会を滅ぼし叢雲宝剣（神器的真人＝出口聖師及び霊界物語 【15/11 大蛇退治の段参照】）を得、天祖（国祖を補佐するために天から下られた御三体の大神＝天照皇大神＝ミロクの大神【太古の神の因縁】）に奉ったのです。即ち聖師（救世主）がこの世に再誕し霊界物語を世に出す（天祖に奉る）ことで、ミロクの世が実現するのです。

神諭には坤之金神^{しんゆう ひつじきのこんじん}、小松林命（聖師）は天のミロク様と書かれているので、この「序」の天祖も神素蓋鳴命も天之御中主神のことで、いわば立場の違いによって名前が違うようなものではないでしょうか。

この序の「五六七（みろく）神政の成就、松の世を建設し」は当然の事ながら開教の始めから未来にかけての事であり、天岩戸開きが二度目を指すとすれば、太古の神世の物語も霊界探検も「太古から現代を経て未来への神世の物語」と考えられます。

「みろく」は一般に弥勒と書き「弥勒信仰」は中国から朝鮮、日本へと広く信じられています。五、六、七と書いて「みろく」と読ませるのは大本独自の考え方です。釈迦の教えがすたれ五六億七千万年後に現れ此の世を救うのが弥勒菩薩です。大本では先ほどの国祖が御引退になり三千年（非常に長い時間）の長きにわたって陰からのご守護を頂き明治二十五年天の大神様の許しを得て再びこの世に出られたのです。引退の際のお約束として御再現の折には天のミロクの大神様がお手伝いに地に下られるのです。

「松の世は」松は常緑樹で一年中青葉を着け色が変わることがないように、ミロクの大神様が治める世が永遠に変わらない事を意味しています。

「苦・集・滅・道を説き、道・法・礼・節を開示せし」は霊界物語の重要なテーマの一つです。そして霊界物語に出てくる話は現実社会の出来事に対しての喩え話ではありません。宇宙に展開した神々の歴史物語であり同時にこれから起こる物語でもあります。

以上を要約すれば以下ようになります。

現代社会は政治経済文化、どれをとっても行き詰まった状態で、人心は極度に荒廃しています。開祖が明治二十五年に国祖の神憑りによって「世の立替立直し」を叫ばれました。それは物質的方面は大いに進歩したが、それを管理制御する精神はますます後退しています。この宇宙はこのまま進めば滅亡するしか有りません。この状態を改め人々が永遠に心穏やかに何の苦しみもなく暮らせる世を実現するため大本が出現したのです。それは現代社会とは大きく形態の違った社会です。現代の社会構造から見ると後退した社会に見えるかも知れません。今風に言えば永遠に持続可能な社会の実現です。それは物質万能主義ではなく、精神的生活を主体にした社会、言い換えれば神を全ての中心に置いた社会構造であり生活です。

口述著者出口王仁三郎（聖師）や開祖出口直は伝記によると現代の我々には想像を絶するような貧しい生活をされています。いわば最下層の生活をされていたのです。古事記には叢雲宝剣は^{おろち}大蛇の尾から出てきたと書かれています。聖師の書かれた古事記略解では大蛇の尾とは頭（^{かみ}上）に対する^{しも}下で下層社会を指します。最下層の社会にお育ちになった聖師（叢雲宝剣）が天祖の命によって再誕生、ミロクの世実現の手段とも云うべき霊界物語を口述し、社会の改造を精神的方面より行われる時代が来た事を示しています。それは霊主体従の本当の意味を理解して初めて実現する事であります。物質的にどんなに進歩しても、と言うより進歩すればするほどそれをコントロールする心、即ち靈的（精神的）な改造が行われなければ社会は滅びの一途を辿って行きます。

霊界物語にはこの世の成りたちや、人としての踏むべき道である苦集滅道や道法礼節が教え諭され、太古の神世から現代を経て未来に及ぶ霊界の状況が現界にも及ぶ事を示され、未だかつてどの宗教も教えなかった霊界の様子を克明に示しています。そして、霊界物語（正しい教）が世に出る事によってミロクの大神様による顕界（我々の住む世界）、幽界（死後の世界で中有界、地獄界）、神界（神々の世界）の三千世界を修理固成し神の理想世界であるミロクの世を実現し、国祖を地上神界の統治者となさるのです。

第1巻の御口述を終え、この序文が書かれた大正十月二十日、午後一時は第一次大本事件で、神殿を破壊するダイナマイトの音を聞きながらの御口述でした。

用語の解説

①『神素蓋鳴命』

素蓋鳴尊は記紀神話に出てくる天照大御神の弟神で、高天原で暴れた、荒ぶる神の須佐之男命です。出雲の国の肥の河上で八岐大蛇を退治したと書かれています。この霊界物語での登場はそんなに多くはありませんが、本当の意味での主人公です

*故に神素蓋鳴大神は救世神とも云ひ、^{みろくの}仁愛大神とも申上げ、^{つぎ}撞の大神とも申し上げるのであります。この霊界物語には^{うぶすな}産土山の^{いそ}高原伊祖の神館に於て神素蓋鳴尊が^{あなないきょう}三五教《太古の大本教》を開き給ひ^{あまた}数多の宣伝使を四方に派遣し給ふ御神業は、決して現界ばかりの物語ではありませぬ。霊界即ち天国や精霊界（中有界）や^{ねそこ}根底の国《地獄》まで救ひの道^{みえん}を布衍《広くおしひろげて説明する》し給うた事実であります。【47/総

説】

*第 48 卷や太古の神の因縁を見ると天の御三体の大神は天照皇大神であり撞大神様（ミロク様）として御顕現になられるのです。

*『瑞の御霊とあれませる 神素盞鳴の大神は 現幽神の三界の 身魂を残らず救はむと 尊き御身を
世に下し 千座の置戸を負はせつつ 天が下をば偶もなく 人の姿と現はれて 沐雨櫛風冰雪
を 凌ぎて此世の熱となり 光ともなり塩となり みのりの花と現はれて 暗に迷へる諸々の
身魂を救ひ玉ふこそ 實にも尊き限りなれ』【44/8 光と熱】

以上のお歌があり神素盞鳴の大神は現幽神の三界を救われる神様であり、地上にお生まれになって闇に迷う人々を救う神様であることがわかります。

以上から素盞鳴尊は仁愛大神とも申上げ、撞の大神、天の御三体の大神、天照皇大神とすることになり主神の顕現れであることが解ります。（大本ではこの世をお造りになった神様を、真神または主神と申し上げます。「ス」はこの世が出来る初めは、スの言霊（声音）からであることに依ります。【詳しくは発端の注⑤を参照 P33】）
霊界物語の上で主神と申し上げるときは神素盞鳴尊です。

②『八岐大蛇』

八岐大蛇は記紀神話に出てくる頭が八つ、尾が八つある大蛇です。ここでは世を乱し、人の心を地獄に導く「悪」を象徴するものです。

第 15 卷 第 2 篇 第 11 章「大蛇退治の段」に以下のように示されています。

高志とは外国で、八岐の遠呂智の来て喫う（たべる）とは手を替へ品を替へて、宗教、政治、教育等に各時代を通じて、海外より種々の悪思想が渡来して敬神尊皇報国の至誠を惟 神的に有する、日本魂を混乱し、滅絶させつつある状態をいう。

須佐之男命が老夫（変性男子の身魂）に、お前は どうして泣くのかとお尋ねになるので、私には多くの人民がいますが悪神の口や舌の剣（悪い思想）によって年々天地の恩を忘れ悪思想に染まって心（靈魂）も体（身体）も体主靈従の考えや行動に落下し、更に八岐遠呂智の悪思想を盲従して国家の滅亡を来たす所まで来ている。最後に残る神国の人民（日本人）までが大蛇に喰い殺され様とする時期に来ているので、この世界の惨状を救い助けようと思ひ泣き悲しんでいます。

八岐大蛇による悪思想の蔓延する状態はどうかと素盞鳴尊がお尋ねになられた。

悪神の本体は一つであるが、その真意を汲んで世界を滅亡させる陰謀に参加して居るのが八人の頭株である。

彼らは全地球を舞台に計画を進め、政治、経済、教育、宗教、実業、思想上に、その他の社会事業に対しても密かに、その破壊を企てているのである。また、大蛇の尾である手下達も知らず識らずに参加している。第一次世界大戦や各国の指導者を滅ぼし、労働者を扇動して赤化運動（共産主義）を起こすなどし、遂に日本国にまで迫って来ている。八つ頭とは英、米、露、仏、伊とかの強国に潜伏する巨魁の意味であり、八つ尾とは、それらを頭に盲従する多くの部下の意味である。

③『叢雲宝剣』

第 15 卷 第 2 篇 第 11 章「大蛇退治の段」に以下のように示されている。（古事記の言霊学による解釈）

『故其の中の尾を切りたまふ時、御刀の刃毀けき。怪しと思ほして、御刀の端もて刺割きて見そなはししかば、都牟刈の太刀あり。故此太刀を取らして、怪異しき物ぞと思ほして天照大御神に白し上げたまひき。是は草薙太刀なり』

中の尾と云ふ事は、葦原の中津国《日本》の下層社会の臣民の事である。其臣民を裁断して、身魂《人の体と魂》を精細に解剖点検し玉ふ時に、実に立派な金剛力の神人を認められた状態を称して、御刀の刃毀けきと云ふのである。ア、実に予想外の立派な救世主の身魂が、大蛇の中の尾なる社会の下層に隠れ居る

わい。是は一つの掘り出しものだと謂つて、感激されたことを、怪しと思ほしてと云ふのである。御刀の端もてと云ふ事は、天祖の御遺訓《教え》の光に照し見てと云ふ事である。

『刺割きて見そなはししかば都牟刈之太刀あり』と云ふことは今迄の点検調査の方針を一変し、側面より仔細に御審査になると、四魂五情《一霊四魂の働き。「基本宣伝歌」注：神直日、大直日を参照》の活用全《完全》き大真人《真の道を体得した人》が、中の尾なる下層社会の一隅に、潜みつつあつたのを初めて発見されたと云ふことである。都牟刈之太刀とは言霊学上より解すれば三千世界の大救世主にして、伊都能売の身魂《厳瑞二霊の働きを具えた神人》と云ふ事である。故、此太刀なる大救世主の霊魂を取り立て、異数の真人なりと驚歎され、直ちに天照大御神様、及びその表現神に大切なる御神器として、奉獻されたのである。凡ての青人草を神風の吹きて靡かす如く、徳を以て万民を悦服《心から喜んで従う》せしむる一大真人、日本国の柱石にして世界治平《世の中が治まって平穏なこと》の基たるべき、神器的真人を称して、草薙剣と云ふのである。八岐大蛇の暴狂ひて万民の身魂を絶滅せしめつつある今日、一日も早く草薙神剣の活用ある、真徳の大真人の出現せむことを、希望する次第である。

また草薙剣とは、我日本全国の別名である。この神国を背負つて立つ処の真人は、即ち草薙神剣の霊魂の活用法である。【15/11 大蛇退治の段】

以上から都牟刈之太刀と草薙太刀は同じであり。また、草薙太刀を別名叢雲太刀ともいう。

叢雲の宝剣は日本の下層社会に生まれ、三千世界（神界、幽界、現界）を救う大救世主で厳瑞二霊の働きを具えた、完全無欠な真の道を会得した神人を指す。

④『天祖』

神素蓋鳴命が叢雲宝剣を奉た天祖とは天照大神様です【その詳細は第1巻第22章P135。第15巻第11章/大蛇退治の段。32巻20章/瑞の言霊。59巻序を参照】 また、「国祖を地上霊界の主宰神たらしめたまひし」の権威ある神は撞の大神様（天照皇大神＝神素蓋鳴大神）ですから天祖を天照皇大神と考える事も正しいのです。【詳細は第1巻第22章P133以下を参照】 ただし、この文章の場合、地上に降られた神素蓋鳴命が剣を奉った天祖は姉大神の天照大神とするのが適切ではないでしょうか。

第六三巻第4章 山上訓 には以下のように示されている

- 一、 天之御中主 大神、また大国常立 大神を宇宙の⑫主神といふ。
- 一、 このほか天津神 八百万 坐しませども、皆天使と知るべし。眞の神は大国常立大神、又の名は天照皇大神、ただ一柱坐しますのみぞ。

天祖は天の祖神でありこの世をお創りになった神様です。天津神と云えば高天原にお住まいの神様を指しますが、多くは天使であり眞の祖神は天之御中主大神でありその表現神を指します。

この本文の場合、第1巻22章「国祖御退隱の御因縁」の下記文章にあるように天照大御神を指します。

地上の神界の主宰たる大神さへ、かくのごとく御隠退になるといふ有様であるから、地上の主宰たる須佐之男命も亦、八百万の神々に、神退ひに退はるるの己むなきにいたりたまひ、自転倒嶋を立去りて、世界のはしばしに漂泊の旅をつづけられることになった。しかし須佐之男命は、現界において八岐大蛇を平げ地上を清め、天照大御神にお目につけ給うたと同じやうに、神界においても、すべての悪神を掃蕩して地上を天下泰平に治め、御三体の大神様にお目につけ、地上の主宰の大神となり給ふといふのである。

第32巻第20章 「瑞の言霊」に

さはさりながら伊弉諾の 皇大神の御心 秘かに我れに伝へまし 八岐の大蛇
を言向けて 天地を塞ぐ村雲の 大蛇の剣を奪ひ取り 姉大神に獻れ
豊葦原の神国は 頓て汝《おまえ》の治らす《治める》国

参考： 第11巻 第24章「顕国宮」に『此事忽ち天上に在す天照皇大神の御疑ひを懐かせ給ふ種となり、遂に須佐之男命は、姉神に嫌疑を受け神追ひに追はれ給ふ悲境に陥り給ひたるなり』や伊都能売神論（大賞七

年十二月二日付けには「日の大神、月の大神、^{あまてらすおほみかみ}天照皇大神 三体の大神は」と〔あまてらすおほみかみやあまてらすおほみかみ〕とルビが振られています。

⑤『^{みろく}五^{ろく}六^く七^{しち}の世（^{みろくしんせい}五^{ろく}六^く七^{しち}神政）』

五六七を「みろく」と読み、弥勒、ミロクに同じ。神の理想世界で大本出現の意義であり、目指す方向です。神政は神の教えを基に行われる^{まつりごと}政^{まつりごと}です。みろくの世は伊都能売神諭には『^{つぎ}撞^{つぎ}の大神様ミロク様が、肝心の世を治め遊ばず^{しぐみ}経^{しぐみ}綸となりたのを、五六七の世と申すのであるぞよ』とあります。ミロクの世は漠然と来るものではありません、神様にとって、また我々にとっても血を吐く思いをして迎えるものです。

五六七をミロクと読む謂れは「発端」注⑩を参照

注：五六七とはかくも尊い意味です。決して車のナンバーに交通事故のお守りとして選ぶ数字ではありません。

⑥『松の世』

大本神諭の中に出てくる言葉、松は常緑樹で変らない事から、永遠不変に平和に治まる世、ミロクの世をいう。待つをかけて、待望久しい世の意味も含められる

⑦『国 祖』

宇宙は天地剖判のおり神の働きで天と地に分かれます。地の世界をお造りになったのが^{おやがみ}国の祖神、国常立尊です。天の世界を天津国、地の世界を国津国と云い、そこに住む神々を天津神、国津神と云います。

⑧『苦・集・滅・道』

苦集滅道は水鏡 131 には以下のように示されている。

【苦】は苦しみである。人生に苦といふものがあればこそ楽の味はひが判るのである。人間が飢んとする時、凍えんとする時、或は重い病にかかる時、可愛い妻子に別れる時、汗を絞つて働く時、峻坂を登る時などは、必ずこの苦と云ふものを味はふものである。此苦があつてこそ、楽しいとか、嬉しいとか、面白いとか云ふ結果を生み出して来るのである。人生に苦といふものが無いとすれば、無生機物も同様で、天地経綸の神業に奉仕する事は絶対に不可能である。人生は苦しい中に楽しみがあり、楽しい中に苦しみがあつて永遠に進歩発達するもので、寒暑と戦ひ、困難と戦ひ、悪と戦ひ、さうして是等の苦しみに打ち勝つた時の愉快は、実に人生の花となり、実となるものである。高い山に登るのは苦しいが、其頂上に登りつめて四方を見晴す時の愉快な気分は、山登りの苦しみを贖ふて尚余りある楽しみである。

【集】、宇宙一切は総て細胞の集合体である。日月星辰あり、地には山川草木あり、禽獣虫魚あり、森羅万象悉く細胞の集合体ならざるは無いのである。家庭を作るも、国家を樹つるのも、同志が集まつて団体をつくるのも、これ皆集である。家を一つ建てるにも柱や桁や礎や壁や、屋根其外種々の物を集めなくては家が出来ない。人間の体一つを見ても四肢五体、五臓六腑、神経、動静脈、筋肉、血管、毛髪、爪など、種々雑多の分子が集まらなければ人体は構成されない。天国の団体を作るにも、智慧証覚の相似せるものが相寄り相集まつて、かたちづくるものである。これ皆集である。要するに、前にのべた【苦】は人生の本義を示し、【集】は宇宙一切の組織を示したものである。

【滅】は、形あるものは必ず滅するものである。又如何なる心の罪と雖も天地惟神の大道によつて朝日に氷のとけるが如く滅するものである。たとへば百姓が種々の虫に作物を荒されて困る時、種々の工夫をこらして、其害虫を全滅せんとして居るが、到底これは人力では滅す事は出来ない。唯其一部分を滅し得るだけである。害虫は植物の根や幹や、梢又は草の根に産卵して種属の繁殖をはかつて居るが、併し乍ら冬の厳寒ある為に其大部分は滅ぼされて終ふ。これは天地惟神の摂理であつて滅の作用である。仏教に寂滅為楽と云ふ語があるが、人間がこの天地から死滅して仕舞へば、何の苦痛も感じない極楽の境地に入ると説くものがあるが、これは実に浅薄極まる議論である。寂滅為楽と云ふ意義は、総ての罪悪が消滅し、害毒が滅尽し

たならば、極楽浄土に現代が化すると云ふ意味である。総て人間そのものは無始無終の神の分身である以上、どこ迄も死滅するものではない。五尺の軀格は滅ぼすにしても、人間の本体其ものは永遠無窮に滅尽しないのである。併し乍ら、悪逆とか、無道とか、曲神とかいふものはきつと神の力と信仰力によつて滅し得るものである。これ等をさして滅といふのである。

【道】は道と云ひ、言葉と云ひ、神とも云ふ。宇宙に遍満充実する神の力をさして、みちみつと云ふのである。要するに苦集滅の意義を総括したものが道となるのである。道は靈的にも体的にも踏まねば、到底天国に達し、彼岸に渡る事が出来ない。故に空中にも道があり、地上にも道があり、海の面にも道がある。道は充ち満つる意味であり、靈力体の三大元質を統一したる意味であつて、これが所謂瑞霊の働きである。仏典にはミロク下生して、苦集滅道を説き、道法礼節を開示す、と出て居るが、苦集滅道と云ふも、道法礼節を開示すると云ふも、意味は同じことである。要するに苦集滅道は体であり、道法礼節は用とも云ふべきものである。

要約すると

苦＝人生の本義である。苦があつて、初めて楽が感じられる。

集＝宇宙一切の組織である。全てのものは集まって出来ている。

滅＝一切の形は滅するものであるが、心の罪もまた神徳によつて滅することを意味している。

道＝宇宙に遍満充実する神の力で、苦集滅道を総括したものが道である。

苦集滅道も道法礼節も同じ意味で、前者を体とすれば後者は用である。

⑨『神幽両界』

第五章 「霊界の修業」の冒頭に『霊界には天界と、地獄界と、中有界との三大境域があつて、天界は正しき神々や正しき人々の靈魂の安住する国であり、地獄界は邪神の集まる国であり、罪悪者の墮ちてゆく国である。そして天界は至善、至美、至明、至楽の神境で、天の神界、地の神界に別れてをり、天の神界にも地の神界にも、各自三段の区劃が定まり、上中下の三段の御魂が、それぞれに鎮まる樂園である。地獄界も根の国、底の国にわかれ、各自三段に区劃され、罪の軽重、大小によりて、それぞれに墮ちてゆく至悪、至醜、至寒、至苦の刑域である』とあります。

我々が死後赴く霊界は神界と幽界に分かれ、神界は正しい神々や人々の住む世界（天国）で、天の神界と、地の神界がある。幽界は中有界（天国と地獄の中間）や地獄界を指し、地獄は邪神や罪悪者の墮ちてゆく国で根の国と底の国の別がある。

⑩『靈主体従』 反対語「体主靈従」

原文注に「宇宙は神靈世界が主で、地上物質界を従と考える。人も靈魂が本体で、身体はその入れ物であり、すべてを神靈世界、靈魂を主とし、肉体が従とする考えとやりかた」とあります。

【第1巻発端】には

御神諭に身魂の樹替樹直しといふことがある。ミタマといへば、靈魂のみのことと思つてゐる人が沢山にあるらしい。身は身体、または物質界を指し、魂とは靈魂、心性《こころ》、神界等を指したまうたのである。すべて宇宙は靈が本《基本》で、体が末となつてゐる。身の方面、物質的現界（物質界）の改造を断行されるのは国祖^{おほくにとこちのかみ}常立神であり、精神界、神靈界の改造を断行したまふのは、豊国主神^{とよくにぬしのかみ}の神権である。ゆゑに宇宙一切は靈界が主であり、現界が従であるから、これを称して靈主体従といふのである。

靈主体従の身魂を靈の本の身魂といひ、体主靈従の身魂を自己愛智の身魂といふ。靈主体従の身魂は、一切天地の律法に^{かな}適ひたる行動を好んで遂行せむとし、常に天下公共のために心身をささげ、犠牲的行動をもつて本懐となし、至真、至善、至美、至直の大精神を発揮する、救世の神業に奉仕する神や人の身魂である。体主靈従の身魂は私利私慾にふけり、天地の神明を畏れず、体慾を重んじ、衣食住にのみ心を^{わずら}煩

はし、利によりて集まり、利によつて散じ、その行動は常に正鵠(要点)を欠き、利己主義を強調するのほか、一片の義務を弁へず、慈悲を知らず、心はあたかも豺狼《山犬とオオカミ、残酷で貪欲な人》のごとき不善の神や、人をいふのである。

天の大神は、最初に天足彦、胞場姫のふたりを造りて、人体の祖となしたまひ、霊主体従の神木にち体主霊従の果実を喫らせ、『この果実を喰ふべからず』と厳命し、その性質のいかんを試みたまうた。ふたりは体慾にかられて、つひにその厳命を犯し、神の怒りにふれた。これより世界は体主霊従の妖気発生し、神人界に邪悪分子の萌芽を見るにいたつたのである。

【第3巻第14章 霊系の抜擢】

『心得ぬ大足彦のお言葉かな。卑しき侍女をして八頭神《地域を治める神》の妻となすは不均衡なりとか、神界の秩序を紊すものなりとか、仰せられたれども、そのお言葉こそ体主霊従のはなはだしきものなり。いかに卑しき侍女なりとて、その霊性において美しく高貴ならば、たとへ形体の上において卑しき職にありとも、その精神にして立派ならば、霊主体従の本義よりみて之を否定すべきものに非ず。いたづらに門閥的旧思想を墨守《古い習慣や自説を固く守りつつけること》し、いらざる体面論を主張さるるはかへつて神慮に背き、律法の精神をわきまへざる頑冥固陋《頑固で物事の正しい判断ができない》の旧思想なり。かかる所論《論じられている事柄》はほとんど歯牙にかくるに足らず《問題にもならない》』

参 考

「優勝劣敗、弱肉強食の時代」

我よし、強いもの勝ちの優勝劣敗、弱肉強食の時代と書きましたが、はたして皆様には実感があるでしょうか。言葉では何となく受け入れても、現実の生活の中にとどの部分がそうなのか考えてみたことがあるでしょうか。神様は総ての物を等しく愛されます。そして平等に扱われます。その土地に産する食べ物はその土地に住まい、育ったものにとって最適な物です。体にとって必要だからこそ、季節を選び、場所を選んで取れるのです。夏場のトマトやなすは体力をつけ、キーリは暑い夏を過ごすために体を冷やしてくれます。今は季節を通してあります。魚もまた季節季節に応じて一番美味しく、滋養のある魚が捕れます。季節を楽しみ体を健康にしてくれます。これが神が与えられた自然の摂理です。しかし現実には季節を無視し、場所に関係なく儲かるからと売られています。買う方も本来持つ体のバイオリズムを無視し、ただ美味しいから珍しいから、健康によいから？と季節に関係なく食べています。

世の中は力のある者、経済的に豊かな者が多くを得、弱者は時としてその日の食べ物にも有りつけません。世界には自給率40%で残りを外国から輸入し、更に40%を捨てている国民がいます。その捨てる40%をどうして貧しい人に分け与えることが出来ないのでしょうか。

今の若者も親もテレビに出てお金を儲け華やかな生活を望みます。金が総てのようです。スポーツ選手は強く秀でた才能が総てで誰もがあこがれ賛美します。勝てば官軍で総てが正義のようです。少年は自分に才能があろうが無かろうが、人の前で自分は将来一流選手になるといいます。それが当たり前で正しいかのように先生も親も考えています。優秀な野球選手は何十億という報酬を得ます。しかし才能のない選手は数百万円でその日の生活にやっとなります。また、子供を持つ親は幼稚園の内からよい学校に入れ、よい大学を出て一流の企業に就職し人に優れた生活をする事を夢見ます。優れた能力を持つ事は神がその人に与えた力です。決して自己の欲望のための物ではありません。その能力を社会に役立てるために神より与えられた物です。

現代社会は能力の優れた者が多くを得、劣った者はそれに隷属するのが当然と考えています。（この事をはっきりと意識している人がほとんどいません。それは多くの人がそれなりの生活をし、周囲の弱者を意識しないからです）

こう書いても多くの人はそれが当然だと考えています。神から与えられた能力は他人の為に最大限に使うのが

本来その人に与えられた使命です。人は金を得る能力がないからと云って決してさげすまれるものではありません、この世に生まれてきた以上は必ずそこに使命があるはず。他の人が成し得ない役目を担って生まれてきたのです。何故なら人は神の子神の宮で、この地上においては神の代行者だからです。多くのスポーツは勝負を争います。必ず勝者と敗者が生まれ、そこには相手に対しての精神的な憎悪が生まれます。現界的にはさしたる争いではないように見えても霊界では凄まじい闘争をしています。

こうした考えを述べると至極当然と考える人もいます

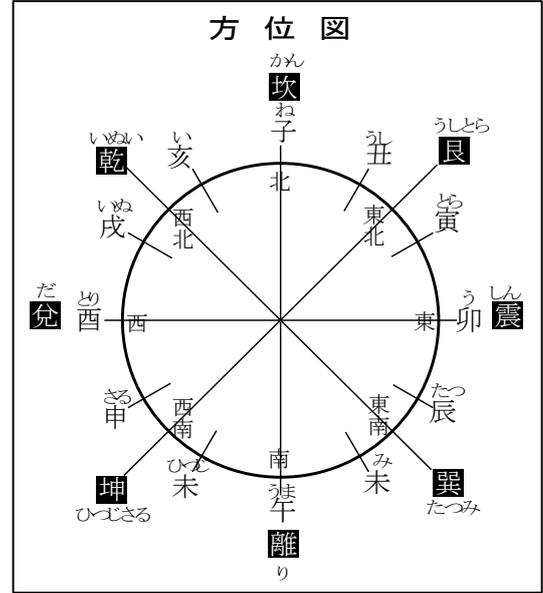
う！ そして頭の中では納得しています。しかし実際の生活ではとてもほど遠いのではないのでしょうか。ある人は日中外出するとき玄関の鍵を掛けないそうです。また外出先で車に鍵をかけることはほとんどないそうです。一時その人は鍵を掛けないのは自分にとって好いが、もし誰かが出来心で犯罪を起こさせることになるので、そうした事がないよう鍵を掛けるべきと考えた事があったそうです。しかし、自分の不注意で泥棒に出来心を起こさせたと考えることは正しい事でしょうか。大本人は全ての行為が神の意志によって為されると考えるべきで、自分に起こる事は神の意志と受け止めるべきです。自分が何かをしたとか、させたとか考える事は自分にその能力があると考える事で大本人の取るべき態度とはいえないと言っていました。

⑪ 『国常立命』

宇宙は四〇億年の歳月を経て大国常立命によって創られました。その後天地は剖判（天と地が分れる）し、地の世界は国常立命のお働きによって山野河海が形づくられ、修理固成によってほぼ今日のような宇宙となりました。その後禽獣虫魚や樹木が生まれ、また人が生まれます。そして、国常立命によって地上世界は治められ数百年の間は国祖御神政の時代が続きます。しかし、天地の間に残っていた滓のような邪気が凝り固まって三種の邪気を生み、次第に神人の心を蝕み、ついにはその勢力を拡大し国祖国常立大神を御引退に追い込み、悪盛んにして天に勝つ時代を迎えます。地の高天原であるエルサレムに居られた国祖は邪神に憑依された悪神によって陥れられ、世界の東北に位置する日本国に御引退になられます。

方位では東北を「うしとら（艮）」といいます。それで国祖国常立命を「艮の金神」と申し上げます。また、金神とは崇り神のことで、悪神達は国祖を崇り神として煎り豆に花が咲いたら出てこいとして、節分の夜に隠退させ、正月の門松や節句の行事に事寄せ調伏（人をのろい殺す）しました。この事は信仰的には国祖が千座の置戸を負われ、衆生一切の罪けがれを一神に引き受けられた贖罪（犠牲や代償を捧げることによって罪過をあがなうこと）を意味します。しかし、時節が来て、天神の許しを得て煎り豆にも花が咲き明治二五年（大本の開教）に天の岩戸は再び開きこの世に出られたのです。

世間一般では節分を悪魔払いとして、鬼は外福は内と云って炒り豆を播きますが、大本では節分の夜に行う「節分大祓」の行事は、天地、社会、人事万般に渡る厳粛な潔斎の行事です。個人においては人型に姓名を書き、一年間の罪穢れを託し、祭典後に和知川（現在は若狭湾の海に）流します。



- 一、節分の 夜に退はれしわが神の ふたたび現れます時は来にけり
一、三千年の 神の忍びをかしこみて 祢への歌は鳴り出でにけり
一、和知川の 流れに罪を流し捨て あたらしき神の御園にすすむ

（第62巻の第四六九—四

八一）

なお、国常立命の妻神を豊雲野命と申し上げ、また坤^{ひつじさる}の金神と申し上げます。

⑫ 『初発の神諭』

神諭とは「大本神諭」のことで、明治25年旧正月（新1月30日）、開祖（出口なお）57才の折に良^{うしろ}の金神^{こんじん}国常立命（国祖）が開祖に神憑（大本では帰神という）りして発せられた神示が「御筆先」です。筆先は全文が平仮名で一部独特の文字が使われています。開祖が昇天される大正7年までの二七年間に半紙一万巻の筆先を書かれます。その中から聖師が取捨選択し漢字を当てたのが大本神諭で大正六年 雑誌「神霊界」に初めて発表されます。《詳細は「霊界物語の概要」参照》

以下が初発の神諭です

『三ぜん世界^{いちど}一同に開く梅の花 良の金神の世に成りたぞよ。梅で開いて松で治める、神国の世になりたぞよ。日本は神道、神が構はな行けぬ国であるぞよ。外国は獣類^{けもの}の世、強いもの勝ちの、悪魔ばかりの国であるぞよ。日本も獣の世になりて居るぞよ。外国人にばかされて、尻の毛まで抜かれて居りても、^ままだ眼が覚めん暗がりの世になりて居るぞよ

これでは国が立ちて行かんから、神が表に現れて、三千世界の立替え立直しを致すぞよ、天下太平に世を治めて、^{まんごまつだい}万古末代《永遠》続く神国の世に致すぞよ。神が申した事は、^ふ一分一厘違はんぞよ。毛筋の横巾ほども間違いは無いぞよ。これが違ふたら、神は此の世に居らんぞよ』 【大本神諭 第1集 愛善世界社版】

と獅子吼され国祖の再現、大本の発祥と、世の立替えた立直しを宣言されました。そして、この事が違ったら神は此の世にいないとまで確信に満ちて述べられています。

この初発の神諭は筆先全体の主旨、精神をもっともよく表現し、大本出現の意義を端的にのべられています。

「肉宮」は肉は肉体、宮は神を祀る宮で神が肉体に宿ること。

⑬ 『主神とは』

第六三巻第4章 山上訓 には以下のように示されている

- 一、^{あめの み なかぬしのおほかみ}天之御中主 大神、また^{おほくにとこたちのおほかみ}大国常立 大神を宇宙の主神といふ。
一、^{いづ みたま}叡の御霊 日の大神、^{みづ みたま}瑞の御魂月の大神は、^す主の神即ち大国常立大神の神霊の御顕現にして、高天原の天国にては日の大神と^{あら}顕はれ給ひ、高天原の^{れいごに}霊国にては月の大神と顕はれ給ふ。
一、このほか天津神^や八百万^{ほよろづま}坐しませども、皆天使と知るべし。^{まこと}眞の神は大国常立大神、又の名は天照皇大神、ただ一柱^{おほかみ}坐しますのみぞ。

天之御中主大神《幽の幽》はこの世をお造りになられた根元の神様です。大国常立大神《幽の顕》は天之御中主大神が宇宙でその力を発揮（ご活動）されたときの神名です。大本ではこの世をお造りになった神様を、^{しんじん}眞神または主神と申し上げます。「ス」は宇宙が出来る初めは、^{ことたま}スの言霊（声音）からであることに依ります。【詳しくは発端の注⑤を参照 P33】） 霊界物語の上で主神と申し上げるときは神素盞鳴尊です。

良^{りょうでん}田^{たね}も種^まを蒔^まかずば忽^{たちま}ちに

雑草^は茂りて荒れ果^はつるなり

光明の真生活に入らむには

神を知るこそ第一義なり

各人の日々の職業も大神の

使命なりせば怠^{おこた}るべからず